

脳卒中に関する文献調査

(分担研究：コーホート調査実施の基礎的検討)

森尾真介¹⁾ 岡本直幸²⁾ 中井信也³⁾

原田 久⁴⁾ 藤永健太郎⁵⁾

要約：成人期の脳卒中(または脳血管疾患)の発生に対する、小児期あるいは青年期の諸要因の作用を調べようとした研究論文はごく少数である。脳卒中を扱った文献は全てわが国の研究者が行ったものであり、外国のものは見つからなかった。これらの文献は、少年期の2～3年間だけの追跡調査や一時点の横断研究の結果より、少年期の諸要因と脳卒中の危険因子(例えば、高血圧、高コレステロール血症、肥満等)との関係を解析し、将来の脳卒中の発生を考察したものであり、少年期あるいは青年期の集団を成人期まで追跡調査したものではない。少年期あるいは青年期の諸要因と成人期の脳卒中の発生との関係はまだ不明瞭な部分が多い。

見出し語：脳卒中(脳血管疾患)、高血圧、高コレステロール血症、肥満

1. はじめに

少年期あるいは青年期の諸要因と成人期の脳卒中の発生と関係を解析した疫学調査・研究は見つからなかった。従って、青・少年期の諸要因の脳卒中発生に対する影響は、青・少年期の諸要因と脳卒中の危険因子とされている高血圧、高コレステロール血症、肥満等との関係を解析した文献より推測せざるを得ない。

青・少年期の諸要因と成人期の脳卒中の発生との関係を解析した文献が殆ど存在しない理由として、青・少年期から成人期までの長期間の追跡調査が容易でないこと、外国では成人病として悪性

新生物、心疾患が問題となっており、脳卒中を扱った疫学研究が少ないこと、脳卒中の危険因子を調査することでその後の脳卒中の発生が推測できること等が考えられる。

2. 事項別要旨

1) 対象：小児を対象とし、小児期の脳卒中の発生、死亡を扱った文献はまず存在しないであろう。また、小児期に調査を開始し、長期間の追跡後、成人期の脳卒中の発生、死亡を扱った文献は、見つけることが出来なかった。小児を対象とした疫学研究としては、数年の追跡後、脳卒中の危険因

- 1) 鳥取大学医学部 (Tottori Univ. School of Medicine)
- 2) 神奈川県立ガンセンター (Kanagawa Cancer Center)
- 3) 神奈川県大和保健所 (Yamato Health Center)
- 4) 神奈川県藤沢保健所 (Fujisawa Health Center)
- 5) 神奈川県小田原保健所 (Odawara Health Center)

子の発生について調べたコホート研究か、ある一時点で脳卒中の危険因子と諸要因との関係を調べた横断研究が多い。

もちろん、成人を対象とした脳卒中の疫学研究は多数あるが、今回の文献調査の対象ではない。

2)方法：コホート研究と横断研究が主体であり、症例・対照研究は少なかった。症例・対照研究が少ない理由は、成人になった調査対象者より、小児期の生活・習慣等を正確に把握するのが困難なことによるものであろう。

コホート研究の追跡期間は多くの場合数年であり、小児期に存在する危険因子が成人期まで持続するかを調べた研究は、外国の研究がごく少数あり、わが国の研究は見つからなかった。

3)結果：少年期または青年期の諸要因と脳卒中の発生・死亡にに関しては、以下に述べる青・小児期の諸要因と脳卒中の危険因子との関係が明らかにされている。

(1)肥満の家族歴のあること、母親の肥満、小児の食生活が小児期の肥満をもたらす。

(文献：児玉(1987)、Cresanta, A.(1987)、Simic, B.S.(1983))

(2)高血圧の家族歴のある小児、および肥満の小児には高血圧のものが多い。

(文献：児玉(1987)、森(1987)、田中(1987)、Cresanta, A.(1987)、Ito, Y.(1986)、伊藤(1985)、藤田(1987)、佐藤(1988))

(3)小児期の肥満、高血圧、高コレ

ステロール血症は数年間持続する。

(文献：森(1987)、田中(1987)、Freedman, D.S.(1987)、Massberg, H.O.(1989)、Sorensen, T.I.A.(1988))

(4)成人期まで肥満、高血圧、高コレステロール血症が持続したならば、脳卒中の危険因子となる。
(文献：Reed, D.M.(1988)、中野(1990)、福沢(1990))

4)考察：研究班の文献レビューの項目として「脳卒中」は、あまり適切でなかったことが明らかとなった。小児期の諸要因が成人病の発生に及ぼす影響を調べる研究班では、今後しばらくこの項目の文献レビューは不必要であろう。小児期または青年期の諸要因と脳卒中の危険因子との関係を調べた文献の検索を十分行なえば、成人を対象として行なわれてきた脳卒中の疫学研究の結果より、青・少年期の諸要因と脳卒中との関係が推測できる。

しかし、脳卒中の危険因子である肥満、高血圧、高コレステロール血症等が、青・少年期に発生した場合、どの程度持続するかについてはまだ未解明である。青・少年期の脳卒中の危険因子の持続について調査することが重要である。これらの危険因子は食生活と深く関係しており、調査を実施する場合には、食生活の異なる複数の地域での調査が望ましい。

3. Recommendation

1)肥満、高血圧、脳卒中の家族歴を調べることが必要である。

2)母親の妊娠前、中、後の身長、体

重、児の出生時身長、体重を把握することが必要である。

3)対象者の一部で食塩摂取量を測定することが必要である。

4)経時的な血圧測定、血液検査が望ましい。

5)対象者の一部は25歳以後も、脳卒中発生が高くなる40歳台まで追跡調査することが望ましい。

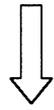
4. 参考文献

1. 児島三郎、他：大和ヘルス財団研究業績集. 11. 8~15. 1987.
2. 森忠三、他：大和ヘルス財団研究業績集. 11. 164~170. 1987.
3. 田中平三、他：日本公衛誌. 34. 439~451. 1987.
4. Freedman, D.S., et al.: *Amr. J. Pub. Health.* 77(5). 588~592. 1987.
5. Mossberg, H-O.: *The Lancet.* I. 491~493. 1989.
6. Gillum, R.F., et al.: *J. Chron. Dis.* 37(11). 839~851. 1984.
7. Cresanta, J.L., et al.: *J. Clin. Hypertens.* 3. 559~566. 1987.
8. Reed, D.M., et al.: *The Stroke.* 19. 820~825. 1988.
9. 中野正孝、他：日本公衛誌. 37(1). 21~32. 1990.
10. 福沢陽一郎、他：日衛誌. 45(4). 890~903. 1990.
11. Sorensen, T.I.A., et al.: *Amr. J. Epidemiol.* 127(1). 104~113. 1988.
12. Ito, Y.: *Jpn. Circulat. J.* 50(12). 1318~1320. 1986.
13. 伊藤雄平、他：日本小児学誌. 89(12). 2700~2705. 1985.
14. 藤田幸子：東京女医大学誌. 57(10). 85~90. 1987.
15. 佐藤隆美、他：小児保健研究. 47(1). 23~28. 1988.
16. 高橋弘、他：四国公衛誌. 29(1). 30~35. 1984.
17. 鷹嘴テル、他：岩手大学教育学部年報. 45(2). 17~47. 1986.
18. Araki, S., et al.: *Tohoku J. exp. Med.* 149. 213~219. 1986.
19. Berenson, G.S., et al.: *Amr. Heart J.* 108. 672~683. 1984.
20. Simic, B.S.: *Preventive Medicine.* 12. 47~52. 1983.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:成人期の脳卒中(または脳血管疾患)の発生に対する、小児期あるいは青年期の諸要因の作用を調べようとした研究論文はごく少数である。脳卒中を扱った文献は全てわが国の研究者が行ったものであり、外国のものは見つからなかった。これらの文献は、少年期の2~3年間だけの追跡調査や一時点の横断研究の結果より、少年期の諸要因と脳卒中の危険因子(例えば、高血圧、高コレステロール血症、肥満等)との関係を解析し、将来の脳卒中の発生を考察したものであり、少年期あるいは青年期の集団を成人期まで追跡調査したものではない。少年期あるいは青年期の諸要因と成人期の脳卒中の発生との関係はまだ不明瞭な部分が多い。